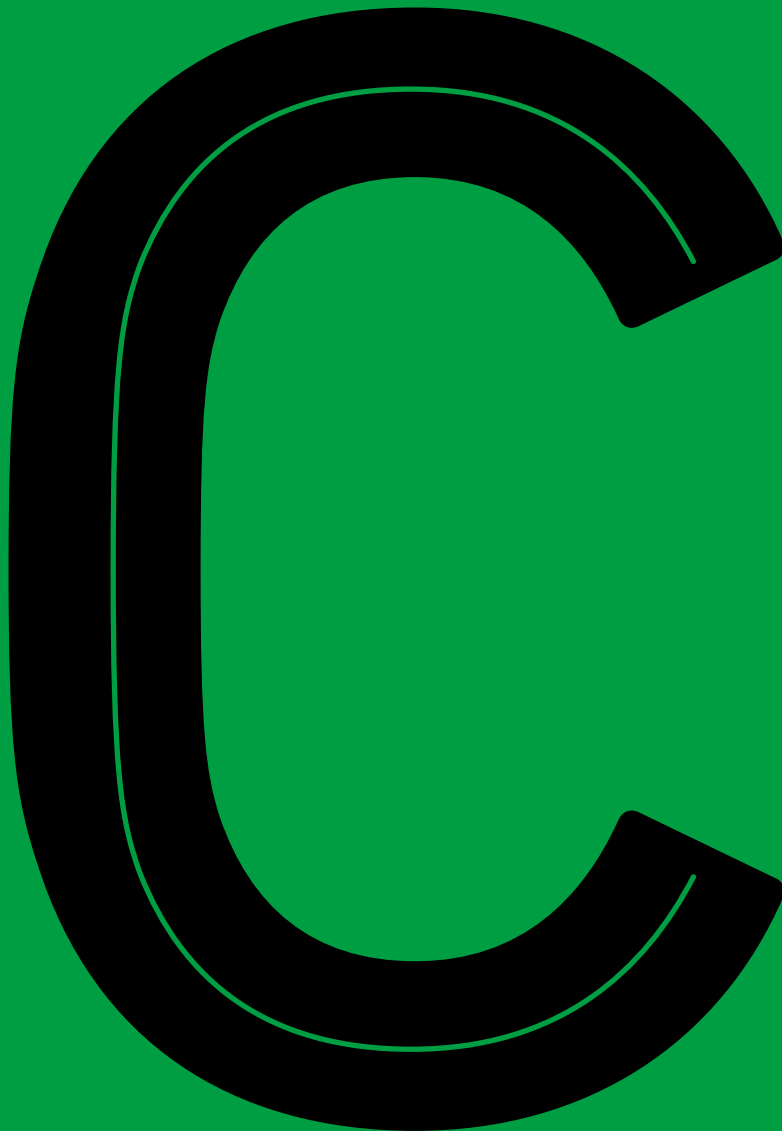




paper



no.002



遠藤水城 × アサダワタル
(インディペンデントキュレーター) (日常編集家)



小野田泰明・芹沢高志
(建築計画者) (アートディレクター)



益山貴司
(劇作家、子供鑑人代表)



遠藤水城 × アサダワタル

(インディペンデントキュレーター)

(日常編集家)

異なる活動領域を持つ2人による対談企画「CO-DIALOGUE」。2回目となる今回は、京都にて若手芸術家へ制作・居住・発表の場を支援する遠藤水城氏、関西を拠点に「住み開き」を提唱するアサダワタル氏を招いて、地域において個々のクリエイティビティがどのようにコミュニティを形成しうるか、その可能性についてお話いただいた。

市民全員に開けた技術

アサダ：遠藤くんとは、仕事を一緒にしたことはないけれど、以前から知り合いです。今の拠点は京都ですか？

遠藤：住まいは滋賀なのですが、今春より京都・東山で「HAPS」というプログラムを立ち上げました。京都市が推進する事業で、若手芸術家などの居住場所および制作場所のマッチングや制作プロセスのサポートが主な事業内容ですね。

アサダ：僕も以前、同じような形態で、大阪市の事業である「中之島 4117」[築港 ARC]のディレクターを務めていました。そこでは、アーティストに限らず、地域の中でクリエイティブな取り組みをしたい人のサポートをしていました。現在では、その延長にもなるのですが、個人の活動として自宅を用いた「住み開き」を提唱しています。

遠藤：「中之島 4117」や「築港 ARC」でも制作プロセスの支援を中心にしていたんですね。これまで芸術家に支払われてきた公的なお金の多くは、展覧会開催を目的とした「制作費」や「謝金」という名目ですよ。けれど、「HAPS」の特長は、アウトプットとなる展示を目的としていないことなんです。

アサダ：これまで市民の方からの相談を通して感じたことですが、芸術家と呼ばれる人とそうでない人との分かれ目って曖昧ですよ。どこで線をひくかによって変わってくる。

遠藤：でも、それ自体がやりがいになりそうな気がして。例えば、芸術家だと自認のない人から、とんでもなく素晴らしい提案があっても、お金や人手、技術を提供できるスタンスでいたい。それができるのは、コミュニティアートやソーシャルなアートにキュレーターがどう対峙してきたかという蓄積があるからです。そこで文化に税金を使う意味を考え、さらに展開しないといけない。

アサダ：だけど、やっぱりアウトプットを目的としない活動というのは、成果や評価の基準設定が難しいですよ。

遠藤：わかりやすいのは、国公立美術館の展覧会に出展したり、海外の美術館に作品を収蔵してもらうことですね。結果が数値化できるから。ただ「HAPS」は、運営しながら考えていきたい部分もあって。いわゆる美術や芸術の文脈で作品を制作してなくても、ある人の存在自体から出来事が起こっていくことがあるんですよ。みんなの盛り上げ役で、周囲に良い影響を与える活動の仕方をしている人だとか。そういう人をサポートした方が良いでしょう。「HAPS」がその状況をサポートすることで、京都の文化芸術がおもしろくなっていくのと同時に、そういう出来事が地域住民に与える影響についても考えていきたいと思っています。

暮らしの中から生まれる経済

遠藤：アサダくんは、今年「住み開き」の本をつくりましたよね。

アサダ：そうそう。「住み開き」は、自宅をひとつのメディアとして、またコミュニティをつなぐハブとして開くことを提唱する活動で。僕は、音楽もやっているのですが、そういった表現活動と日常生活を同じレベル、空間で共有していきたいんです。そこには、コンテキストの異なる者同士が公私の立場も超えて混ざり合って、わけのわからないおもしろい状況が生まれうる可能性があると思うんですよ。

遠藤：僕は2年ほど前、滋賀県のある村に引っ越して、お米をつくりながら活動をしています。ただ、農業で稼ぐわけではないので、自分ができるぎりぎりの肉体労働でつくっているのが現状です。雑草を抜くよりも育つスピードの方が早く、自然は待つとれないことを体感していますね。

アサダ：いいですね。僕も近々滋賀に拠点を移す予定です。

遠藤：実は今、地域のご老人と、その村の風習を絵巻物にアーカイブしていつているんですよ。京都で活動する芸術家の卵のよう

photo: Mai Harita



な人たちと進めています。もともとは村のおじいちゃんたちが、薄れゆく昔の風習を残したいと、生まれた話なんです。例えば、木を植えてから手入れをして、切り出す作業までを収めたいとか。

アサダ：いいですね。職能を生かしてますね。だけど、おじいさんたちは、絵巻物というフォーマットは理解できるけど、アートについても共有できるコードがあるかという難しい。そこをつなげて、生活の中に溶け込ませるためには、ひたすら話を聞くことで存在を認めてもらうことや共有できるモチーフで描くということが大切なんだろう。それを村というコミュニティから、街や都市へと変換したときに、「HAPS」の活動にも近いものになるのだと思います。

クリエイティビティの新しい循環

アサダ：「中之島 4117」や「築港 ARC」では、表現者からの相談を受け付けていましたが、コンテンポラリーから町のおじさんまでいろんな方がいました。けれど、相談を受けているうちに、そのラインの解像度はブレていくんですよ。線の引き方がブレていくほど、内容は人生相談へと近づいていく。

遠藤：社会の中にクリエイティビティがどう必要かという根源的な問いに悩んでいる人こそハードコアでおもしろい。

アサダ：ハードコアでおもしろい分、見えないこともありそうですよね。すぐにその表現の成果が社会化されるわけではないから、そのジレンマであせってしまうこともあると思います。

遠藤：僕ね、ヒップホップ大好きなんです。ブラックカルチャーは「あいつのしゃべり方がかっこいい」「あいつのタグがすげえ」といったお互いのクリエイティビティを見る／見られるシステムをつくりあげていて。名も無い貧乏な人でも、お互いを尊重して生きていける、よくできたシステムだと思うんです。

アサダ：お互いをリスペクトしつつ、批評できるシステムですよ。そこに、現地のレコード屋や理髪店みたいなのが絡んでくることでカルチャーが生まれていく。

遠藤：そうそう。美術システムとは異なるクリエイティビティの循環方法を発明したと言っても良い。一部のみに才能があり、ほかは一般人で、その才能の高度な洗練を公的に保護することで社会全体の豊かさとする、というのが欧米的な美術システムですが、ブラックカルチャーシステムは違う。そういったオルタナティブなシステムは地域や階層などにより、特定の文脈内でも成立しうるんです。お互いにクリエイティビティを保証する、さまざまなパターンがありうる。

アサダ：日本ではどうでしょうね。

遠藤：芸術家が社会に介入していく際には、干渉、交渉、摩擦のようなものが生まれて、その過程自体が価値化される視点が必要です。そこにクリエイティビティは宿る。お互いの領域を越えて、求められているという実感につながるまでコミュニケーションを取らないとダメだと思うんです。アーティストには「既存のシステムだけじゃない表現のあり方があることを追求していくことができる」と言い、その一方で地域の人たちには、「自分たちの独自性を発揮することで誰かに見られ、それが喜びやより良い生活の獲得に繋がるような領域がありうる」と伝えること、それこそ僕たちのような人間がすべきことなんじゃないかな。

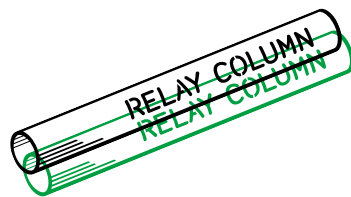
アサダワタル
Wataru Asada

1979年生まれ。「日常再編集」を命題に、音楽、文筆、プロジェクト構想・演出を展開。著書に「住み開き 家から始めるコミュニティ」(筑摩書房)など、弾き語りや音楽を使ったワークショップ、SJO (HEADZ)のドラムを担当、神戸女学院非常勤講師。

遠藤水城
Mizuki Endo

1975年生まれ。企画・執筆多数。2011年より、京都市において「東山 アーティスト・プレイメント・サービス(HAPS)」を立ち上げる。主な編著書に「アメリカまで」(とんつーレコード)、「首根裕 Perfect Moment」(月曜社)など。

リレーコラム つないで見える、人とまちの多彩なあり方



復興の現場で コミュニティを考える

小野田泰明

Yasuaki Onoda



東北大学工学部建築・社会環境工学科 学科長・教授 / 建築計画者
建築のソフトとハードをつなぐ建築計画者として、せんだいメディアテーク、横須賀美術館など各地で先進的な建築の実現に携わる。2003年、蒼北町民ホール設計で日本建築学会賞受賞(阿部仁史氏と共同)。震災後は、建築家による復興支援ネットワーク「アーキエイド」実行委員の一人として復興業務に奔走中。

> 小野田さんが選ぶ次のコラムニストは…
櫻橋修氏(神戸大学工学部准教授)
信頼する建築家のひとり。京大アメフト部の元主将だけに胆力・知力は一流です。(小野田)

なぜ、ここで アートなのか?

芹沢高志

Takashi Serizawa



P3 art and environment 統括ディレクター
1951年東京生まれ。1989年、P3 art and environmentを設立。以後、現代美術、環境計画を中心に、数々のプロジェクトを展開。現在は総合ディレクターとして、別府「混浴温泉世界 2012」の準備に追われている。著書に「この惑星を遊動する」(岩波書店)、「月面からの眺め」(毎日新聞社)ほか。

> 芹沢さんが選ぶ次のコラムニストは…
雨森信氏(Breaker Project ディレクター)
大阪、新世界という濃密な場所に徹底的に寄り添う姿を信頼しています。(芹沢)

私が住む東北では、2011年3月11日を境に人生が一変した人は多い。幸いなことに私の家族や知り合いは無事で、感謝すべき状況にはあるのだが、仕事としては180度の変化があった。自治体や被災地の方々と一緒に、復興業務に深く関わることになったからである。例えば、マスコミで騒がれている高台移転ひとつにしてもその実践には気が遠くなるような作業が求められている。被害を免れた残存集落、生業の起点となる漁業施設、既存交通網、これらと良好な関係を保てる安全な場所を探すだけでも一苦労なのだが、それが見つかったとしても、そこを宅地化する技術的・経済的な課題、地権者との調整、埋蔵文化財の確認など難しい仕事如山ほどある。また、この移転を行うために現在最も使い手のある制度である「防災集団移転促進事業」の適応には、もとの家があった場所を災害危険区域として指定することが求められるのだが、区域内は居住が禁止されるため、元の場所の活用には、商業や工業を独立してそ

10年前の、2002年のことを思い出す。私は北海道、帯広で「デメーテル」という国際美術展の総合ディレクターを務め、帯広競馬場をメイン会場に大規模な屋外展示を実行していた。そのとき「シティ・プロジェクト」というプログラム名で、駅構内や空きビルなど、市内各所を使った若手アーティストの実験的な展示も行ったが、私の主たる関心はまちや地域の振興ではなく、あくまでアートにとっての場所性を再発見したいというものだった。世界のどこにあっても均一な環境を提供する「アートのための空間」、いわゆるホワイトキューブを抜け出して、その場固有の文脈のなかでアートを展開する。場所とアートの組み合わせが持つ可能性を拡張したいと考えていたのだ。地と柄というが、私にとって場所とアートはまさにそういう関係で、相互に関係し合う、切っても切れない関係柄に思えた。その考えは今も変わらない。

2002年は、事務局として関わることになるアサヒ・アート・フェスティバル(AAF)

こに持ってこなければならぬ。けれども今回の被災地の多くでは、住居の一階で商売を営むなど、住むことと働くことは一体的関係にあるため、そうした分離は極めて難しい。

このように被災地域の多くを支えているのは、業、住、さらには歴史が一体となった、複合的なコミュニティだ。都会ではある程度整理して考えることの許されるコミュニティだが、ここでは下手にバラバラにするとそれぞれが死んでしまう複雑な融合物となっており、その融合を切断することなく再配置する丁寧な仕事が必要されているのである。復興が遅いと一方的に糾弾するのではなく、「絆」という抽象的な言葉に逃げるのではなく、現実問題としてそれをいかに実現していくか。困難な作業はこれから地道に続いていく。復興に取り組むことは、その場所のコミュニティを注意深く取り扱うことと同意なのである。

が始まった年でもある。初期は模索も続いたが、公募制を導入したAAF2005以降は全国各地の市民団体やアートNPOが結集し、アートによって地域再生を試みる、大きなうねりに育っていったと考えている。

こんなふうに、この10年、アートがまちに飛び出す現場に身を置いた私だが、そんな私から見ても、現在、全国各地に広がる地域密着型アートプロジェクトの活況には目を見張るものがある。個人の家や商店街から、越後妻有や瀬戸内といった広域圏を対象にするものまで、実に多様なカタチが現れている。しかしこのような状況だからこそ、あえて問わねばならない。「なぜ、ここでアートなのか?」。アートのための空間ではそもそも問う必要もない問いだったが、これに答ええない以上、われわれは本質を見失うことになるだろう。



コーポ北加賀屋 多分野で活躍する協働スタジオの住人による、北加賀屋のいま

REVIEW

us/it presents “think,sort,thought”

Date 2012.3.30 18:00- Venue コーポ北加賀屋

その日は芋煮を手に山口百恵やジェフ・ベックの話で声をあげて笑った。大友良英、見汐麻衣、もぐらが一周するまで、アサダワタルといった出演者の演奏とトークが交互に進むイベント、「think,sort,thought」。「あなたにとっての“ふるさと”を感じられる音楽」というお題に対するトークはあまりに無益でおもしろく贅沢で、大友良英の言葉を借りれば「日々の食事を整えることを、決して腕力にならない無力な音楽をつくり続けることを、個人の無力な生活が世界をつくる世の中を、信じよう」とすら思う程だった。決して大風呂敷ではない。(アーカイブはUstream「think,sort,thought」で視聴可能)

堀井円 (us/it)

ジン「Inter/Phase」を編集。GTSVLのシンセサイザー担当。



FOOD

北加賀屋ソウルフード

有佐祐樹 (marqmw)

お好み焼き 吉四六(北加賀屋 2-10-14)
ミックス玉

¥780

Illustration:Shingo Kokaji



コーポ北加賀屋で入口から一番近い事務所兼住居。宅配業者さんにはコーポ北加賀屋と言えば私。

お好み焼きには、具か生地を売りにする2通りがある。吉四六は後者で生地がうまい。生地の甘みを味わう邪魔をしないよう丁寧につくられている。豪華な具の写真で、目で先に食べさせるものより、ちゃんと美味しいお好み焼きです。

毛利悠子「サーキット Circuits」

Date 2012.4.8 - 30 Venue adanda

センサーやモーターなどさまざまな機械構造を用いて空間を構成する、と聞くとなんだか理工系で男性的なイメージをするかもしれない。しかし実際に「サーキット」を観た人は女性的な感触を得ただろう。仕組みや構造以上に毛利悠子の手癖が色濃かったというこの証明だ。彼女は自宅の鉄粉にまみれたベッドの脇でハンダ付けをしたり、モーターと玩具をホットボンドで固定したりしている。つまり何が言いたいのかというと、彼女にとっての機械構造とは画家にとっての筆と同じく自分を表すひとつのメディアであり、彼女は所謂「メディアアーティスト」ではなく「美術作家」だということ、そしてもちろん展示は素晴らしかったということだ。

小西小多郎 (adanda)

より良く生きるをモットーに美術・舞台・音楽と関わり、今に至る。



SPACE

北加賀屋オルタナティブスポット

家成俊勝 (dot architects)

北加賀屋のボンビドゥーセンター



北加賀屋駅4番出口を出てすぐの駐車場から見えるボンビドゥーセンター。パリの代表的な建築物よろしく、設備配管が血管のように通っている。ともに内部を広く使うための工夫だが、えらい違いだ。

家成俊勝: 1974年兵庫県生まれ。建築家。関西大学法学部法律学科卒業後、大阪工業技術専門学校夜間部を経てドットアーキテツを赤代武志と共同で主宰。建築を専門としながら他分野の人々との協働プロジェクトにも多く携わる。



読み切り連載

川辺の少年たちの物語 (2)

少年は少女と手をつなぎ、巨大な造船ドックと倉庫群の間で潮風を背中に受けていた。目の前には瘦せたヤシの木が整然と並び、ほころんだ雑巾のようなコンクリート道が短くのびている。

「ここはハワイや」「うん」

二人のささやきは、油に陰ったヤシの木の通りを太陽の輝くフェニックス通りへ通るにつれて、はがきだけてしか見たことのない一に変えてしまった。オープンカー、サーフボード、ダイヤモンドヘッド。

少年は造船所の少年工で少女はその事務見習いだった。昼休みのサイレンが鳴るたび、事務室の窓越しに顔を合わせていた二人はやがて帰り道を同じにするようになり、駅の改札で手を振っては結婚を約束するようになつていった。

文と絵 益山貴司

「アイ、ラブ、ユー」と少年がつぶやくと「アイ、ラブ、ユー」と少女もつぶやいた。この言葉だけが二人の知っている英語の全てだった。

少年と少女のフェニックス通りはたった三十歩で終わった。二人の左手の薬指に巻かれた銀紙の指輪は潮風にさらわれ、常夏のハワイは川面から這い上がって来た夕闇に呑まれていった。

「お前らなにやっとなのやー！」年配の守衛が大きな声で叫んだ。「新婚りよこーう」と少年は返し、顔を赤らめる少女の細い腰をアメリカ映画のように抱き寄せた。

「ほんならお泊まりはこちらで！」守衛は言いながら錆びた鉄のゲートを押し開け「はよ帰らんかい！」と怒鳴った。(了)

益山貴司

劇作家、演出家、俳優。代表を勤める劇団「子供鉦人」は昨年来にヨーロッパツアーを行うなど世界規模で活動中。

photo: Masamori Ikeda (YUJKA)



NEWS from CFCO

NEWS 01

おおさか創造千島財団 設立記念レセプションを開催

2012年1月24日にクリエイティブセンター大阪(名村造船所大阪工場跡地)にて、おおさか創造千島財団の設立と設立者である千島土地(株)のメセナ大賞受賞を記念して、シンポジウムとパーティ&ライブを開催いたしました。当日は定員をはるかに上回る約260名が来場。「大阪の、アートのゆくえ」と題したシンポジウムには、大阪のアートに関わる3人のゲストが登場。大阪の創造環境向上のために必要なことについて、アーティスト、プロデューサー、メセナ企業という異なる立場から具体的な提案がいくつも飛び出しました。

NEWS 02

2012年度公募助成 対象活動が決定

当財団の創造活動に対する2012年度公募助成には、計184件の申請があり、選考委員会を経て以下のとおり助成活動を決定いたしました。

①創造活動助成(助成金の交付)16件 ※[]内は申請者名/申請者名50音順

- IRON-MAN 実行委員会 [IRON-MAN 実行委員会]
- 北加賀屋を拠点とする市民工房とアーティストショップを兼ねたスペース開設 [adanda]
- 雑誌 [IN/SECTS] の制作、及びイベントの実施ほか [合同会社インセクト]
- 生西康典「おかえりなさい、うた Dusty Voices, Sound of Stars」(仮) [おかえりなさい、うた 実行委員会]
- 鉄道芸術祭 vol.2「メインタイトル未定」[京阪電車なにわ橋駅アートエリアピーワン運営委員会]
- 子供鉦人ヨーロッパツアー2012 [子供鉦人]
- 10±10 (テン・プラスマイナス・テン) [NPO 法人 子どもとアーティストの出会い]
- 2012年の制作活動および展覧会開催 [佐々木愛]
- 水の未来の物語 @ 別府 [水回プロジェクト]
- Type Trip Exhibition (仮) アジア7都市、グラフィックデザインの今を巡る旅 [Type Trip Exhibition 実行委員会]
- DESIGNEAST 03 - 状況との対話 (仮) [DESIGNEAST 実行委員会]
- Breaker Project [ex - pots2012] [ブレーカープロジェクト実行委員会]
- 世界の演出 [一般社団法人 PLAYWORKS]
- 種から育てる子ども料理教室 [堀田裕介]
- 展覧会: 松井智恵「現代美術と批評のスクール」[松井智恵]
- ①ログスギャラリーの農民車試走会ツアー(仮題) ②農民車の改造と発表(仮題) [ROGUES' GALLERY]

②スペース助成(クリエイティブセンター大阪の無償提供)4件 ※[]内は申請者名/申請者名50音順

- IRON-MAN 実行委員会 [IRON-MAN 実行委員会]
- NEW Creation Festival「Quest for Freedom」(仮) [Dance Company BABY-Q]
- DESIGNEAST 03 - 状況との対話 (仮) [DESIGNEAST 実行委員会]
- ①ログスギャラリーの農民車試走会ツアー(仮題) ②農民車の改造と発表(仮題) [ROGUES' GALLERY]

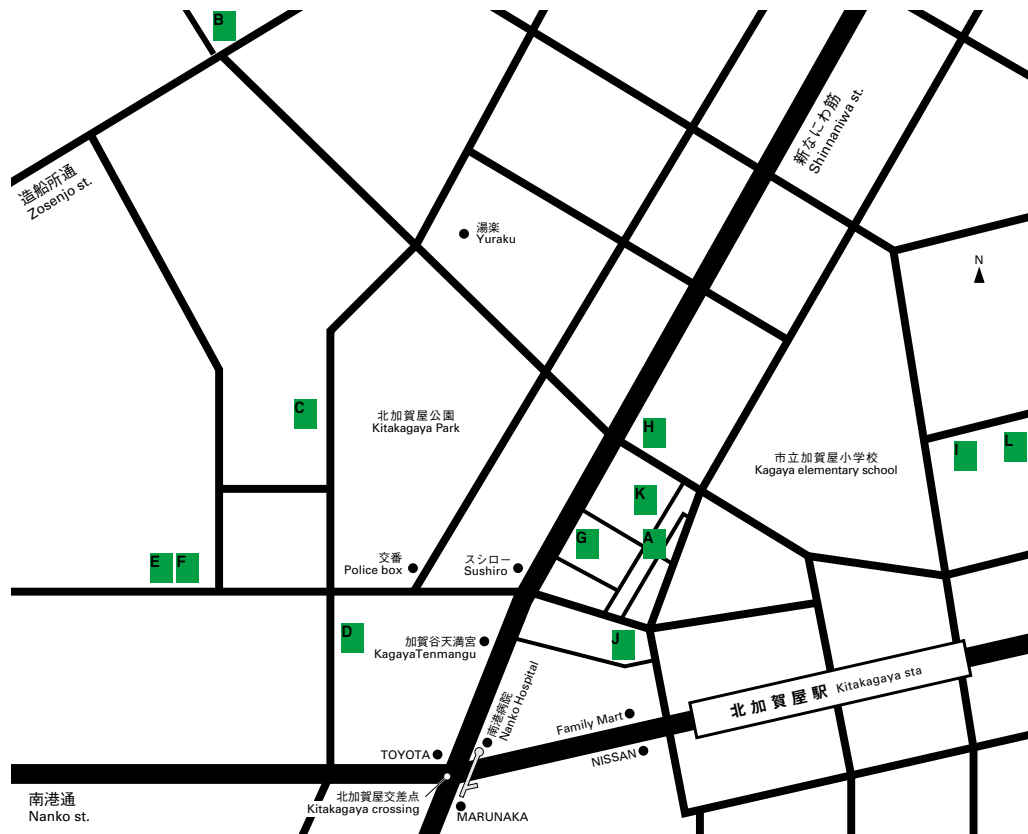


<NEWS01> 右から、森村泰昌氏(美術家)、谷口智之氏(京阪電気鉄道株式会社)、木ノ下智恵子氏(大阪大学)、モデレーターの加藤雅男(当財団理事)

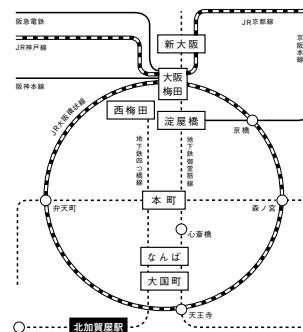


<NEWS02> 財団のロゴをかたどったケータリング「foodscape!」は来場者にも大好評!

おおさか創造千島財団では、芸術・文化が集積する創造拠点として再生が進んでいる北加賀屋エリアを、大阪における創造拠点のモデルケースとして、情報発信 / ネットワーキングの支援を行っています。



- [A] ク・ビレ邸 / インフォメーションセンター [北加賀屋 2-8-8] URL:shoosen-kwan.com/
- [B] クリエイティブセンター大阪 (CCO) / 複合アートスペース [北加賀屋 4-1-55 名村造船跡地] URL:www.namura.cc/
- [C] コーポ北加賀屋 / 協働スタジオ [北加賀屋 5-4-12] URL:www.coop-kitakagaya.blogspot.com/
- [D] おしま絵画教室 / アトリエ [北加賀屋 5-2-31] URL:www.takayukioshima.jimdo.com/
- [E] 藝術中心●カナリヤ条約 / アートスタジオ [北加賀屋 5-5-35] URL:shoosen-kwan.com/
- [F] 鞆籠館 / シェアハウス [北加賀屋 5-5-35] URL:shoosen-kwan.com/
- [G] AIR 大阪 (アーティスト・イン・レジデンス大阪) / 宿泊施設 [北加賀屋 2-9-19] URL:airosaka.com
- [H] HOPE / アートスペース & カフェ・バー [北加賀屋 2-3-17] URL:hope.sub.jp/wp/
- [I] ギャラリー創造 / ギャラリー [北加賀屋 1-6-23] URL:www.sozo.sub.jp/
- [J] Co.to.hana (コトハナ) / アトリエ & オフィス [北加賀屋 2-10-21] URL:www.cotohana.jp/
- [K] 隠れ屋 1632 秘密基地 / 手づくりメガネ & アクセサリー [北加賀屋 2-8-9] URL:www.kakureya1632.com/
- [L] cornucopia / ギャラリー [北加賀屋 1-6-27 カガ第 2 ビル 1F] URL:www.cornucopia3.jp/



paper C No.002
by Creative Foundation for Creative Osaka

「paper C」は、おおさか創造千島財団が発行するフリーペーパーです。関西におけるクリエイティブな活動を、財団が主に拠点を置く大阪・北加賀屋エリアから発信しています。

発行日：2012年5月10日
発行元：一般財団法人 おおさか創造千島財団 事務局
〒559-0011 大阪市住之江区北加賀屋2丁目11番8号千島ビル4階
TEL 06-6681-7806 FAX 06-6681-6188
URL www.chishimatochi.info/found/
編集ディレクション & 編集：多田智美 [MUESUM] 編集：永江大 [MUESUM]
アートディレクション & デザイン：原田祐馬 [UMA/design farm]